

h0101 人間生活学特講 I(人間生活学原論) (2単位 前期)

担当教員：飯村しのぶ

授業のねらい

人間生活学の研究対象・研究方法、研究課題などに関して講義する。
現代社会における生活研究の意義について考えを深める。

到達目標

家政学から人間生活学への発展の流れをとおして、研究対象の広がりや研究方法の特徴について理解できる。
自らの研究テーマを人間生活学とのかかわりとして位置付けることができる。

授業方法

文献講読及び講義形式による。

事前事後学修

随時、事前・事後の課題を提示するので、それらについて1000字程度のレポートにまとめること。(所要時間2時間程度)

授業計画**第1回** ガイダンス

受講者の問題関心と授業のすすめ方

- 第2回** 1. 家政の時代 ……近代以前の家政・生活思想
第3回 2. 家政の時代 ……明治の文明開化と欧米家政思想の移入
第4回 3. 家政の時代 ……明治中期の新たな家政思想
第5回 4. 家政の時代 ……大正期の文化生活と女性の職業
第6回 5. 学問としての家政学 …… 第二次大戦後の家政学部および家政学会の設立
第7回 6. 家政学から生活科学へ
第8回 7. 生活科学から人間生活学へ

第9回 8. 人間生活学の特徴 …… 研究対象・研究方法

第10回 9. 人間生活学の諸相 …… 1) 生活の歴史をどうとらえるか

第11回 10. 人間生活学の諸相 …… 2) 民俗学と考現学

第12回 11. 人間生活学の諸相 …… 3) 生活学とM-Mシステム

第13回 12. 人間生活学と環境問題

第14回 13. 人間生活学と家庭科教育

第15回 14. まとめ

成績評価の方法

受講者の問題関心をもとに講義時における意見発表(50%)、課題に関する小レポート(50%)。

フィードバックの方法

事前・事後の課題に対して、講義時に意見交換する。

履修にあたっての注意

特になし。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

プリント資料を配布。

参考書

講義時に紹介

参考ホームページ

h0201 人間生活学特講 II(生活と教育) (2単位 後期)

担当教員：伊井義人

授業のねらい

現在、さまざまな課題が日本の学校には溢れている。その教育課題が、日本の日常生活にどのような影響を及ぼしているのかを、参考文献や数値データを通して、明らかにしていく。また、課題だけではなく、日本の学校教育の長所も、データ分析などを通して、討議していく。

到達目標

- ・日本の教育問題と日常生活での問題の関連性を、客観的かつ主観的に発見し、探究できる。
- ・教育に関して探求した内容を、自分の言葉で表現できる。

授業方法

- ・担当教員による説明を主として、講義を進めていく。
- ・オンライン授業と対面授業の混合で進めていく。
- ・講義中、いくつかの論点を担当教員が提示し、それについて討議を行う。
- ・講義の後半では、履修者によるテーマ別発表を行なってもらう。そのため事前準備として配布資料の作成が必要となる。

事前事後学修

- ・講義で議論するテーマは、事前に教員によって提示する。そのテーマについて事前に書籍やインターネットなどで情報収集した上で、自らの考えを整理する。(40分程度)
- ・講義内で議論した内容について、他者の考えを加味した上で、自らの意見を再吟味し、整理する。これらは講義内で発表する可能性がある。(20分程度)

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 日本の教育と生活1～概要
- 第3回 日本の教育と生活2～課題
- 第4回 日本の教育と生活3～特色
- 第5回 諸外国から見る日本の教育と生活1～概要
- 第6回 諸外国から見る日本の教育と生活2～課題
- 第7回 諸外国から見る日本の教育と生活3～特色
- 第8回 文献資料から紐解く教育文化と生活文化1～生活習慣と教育
- 第9回 文献資料から紐解く教育文化と生活文化2～モノコトと教育
- 第10回 文献資料から紐解く教育文化と生活文化3～学習の場としての家庭
- 第11回 今後求められる学力1～学力観の歴史
- 第12回 今後求められる学力2～21世紀型学力
- 第13回 今後求められる学力3～就職後に求められる技能
- 第14回 QOL向上に寄与する学校教育とは1
- 第15回 QOL向上に寄与する学校教育とは2

成績評価の方法

発表50%、諸課題50%

フィードバックの方法

- ・個別にフィードバックが必要な場合は、ポータルシステムを通して、コメントする。
- ・クラス全体の議論については、講義内で随時、フィードバックをする。

履修にあたっての注意

人は常に、教育に携わる存在であることを理解した上で、履修してください。
また、討議を重視しますので、自分の考えを相手に伝える「努力」ができる必要があります。

教科書

多様性を活かす教育を考える七つのヒント 伊井義人 共同文化社 2015 978-4-87739-276-5

教科書・参考書に関する備考**参考書**

学習する学校 ビーター・M・センゲ 英知出版 2014 978-4862761408

参考ホームページ

h0311 人間生活学演習 I (4単位 通年)

担当教員：伊井義人

授業のねらい

本演習は、現代の学校教育の現状と課題の分析を行うことを主目的としている。その際、発見した課題に対する解決策を、履修者自らが教育者（教員・保護者・人事担当）になったと仮定して、可能な限り具体的に提示してもらいたい。また、後半部分では、教育関連図書を輪読する。これを通して、教育研究者の先達たちは、教育の現状と課題をいかに考えてきたかを考察してほしい。

到達目標

- ・世界、日本および北海道の教育の現状を分析し、その課題を明らかにすることができる。
- ・教育課題を解決する何らかの方策を考えることができる。
- ・教育関連の書籍を数冊読みこなし、自分の意見を明確に表現することができる。

授業方法

- ・教員が提示した課題に対する発表を履修者が実施し、それに対する質疑応答を通して考えを深める。
- ・教育関連図書を輪読する。そのため発表者は課題図書を読み、配布資料を作成などの事前準備が必要となる。
- ・ポスターなどを通して、研究成果の発表をしてもらう。

事前事後学修

- ・講義で議論するテーマは、事前に教員によって提示する。そのテーマについて事前に書籍やインターネットなどで情報収集した上で、自らの考えを整理する。(40分程度)
- ・講義内で議論した内容について、他者の考えを加味した上で、自らの意見を再吟味し、整理する。これらは講義内で発表する可能性がある。(20分程度)

授業計画

- 第1回 オリエンテーション（研究倫理の確認を含む）
- 第2回 北海道の教育の現状と課題を知る①
- 第3回 北海道の教育の現状と課題を知る②
- 第4回 北海道の教育の現状と課題を知る③
- 第5回 日本の教育の現状と課題を知る①
- 第6回 日本の教育の現状と課題を知る②
- 第7回 日本の教育の現状と課題を知る③
- 第8回 教育の国際的な動向を知る①
- 第9回 教育の国際的な動向を知る②
- 第10回 教育の国際的な動向を知る③
- 第11回 自らの地元の教育の現状と課題を知る①
- 第12回 自らの地元の教育の現状と課題を知る②
- 第13回 教育の現状と課題に対する解決策を提示する①
- 第14回 教育の現状と課題に対する解決策を提示する②
- 第15回 前期の成果に関わるポスター作成（参考文献の提示法など研究倫理について）
- 第16回 教育関連書籍の選定
- 第17回 教育図書の輪読（現代）①
- 第18回 教育図書の輪読（現代）②
- 第19回 教育図書の輪読（現代）③
- 第20回 教育図書の輪読（現代）④
- 第21回 教育図書の輪読（現代）⑤
- 第22回 教育図書の輪読（現代）⑥
- 第23回 教育図書の輪読（現代）⑦
- 第24回 教育図書の輪読（古典）①
- 第25回 教育図書の輪読（古典）②
- 第26回 教育図書の輪読（古典）③
- 第27回 教育図書の輪読（古典）④
- 第28回 教育図書の輪読（古典）⑤
- 第29回 教育図書の輪読（古典）⑥
- 第30回 教育図書の輪読（古典）⑦

成績評価の方法

自らの発表とその質疑応答（70%）、レポート（30%）

フィードバックの方法

- ・個別にフィードバックが必要な場合は、ポータルシステムを通して、コメントする。
- ・クラス全体の議論については、講義内で随時、フィードバックをする。

履修にあたっての注意

教育を他人事ではなく、自分の事柄として引き寄せて考えながら、演習を受けてください。

教科書

特になし

教科書・参考書に関する備考

演習の後半では、教育関連書籍を輪読する。その書籍は、履修者とともに決定したい。

参考書**参考ホームページ**

h0351 人間生活学演習 II (4単位 通年)

担当教員：内田博

授業のねらい

生活を思想の側面から考察することで、生活を歴史的に大づかみに把握する力を養う。

到達目標

個別具体的な生活の諸相を系統的に捉えることができる。

授業方法

文献購読と討論によって進める。文献は事前に読んでおくこと。

事前事後学修

事前に文献の当該箇所を読んで、論点を整理しておくこと、事後には授業を踏まえて、次回の購読に備えて、今回の箇所と次回の箇所との連関を把握できるように読解を進めておくこと。(事前1回90分、事後1回90分)

授業計画

第1回 打ち合わせとテキストの選定、研究倫理指導

第2回 文献購読

第3回 文献購読

第4回 文献購読

第5回 文献購読

第6回 文献購読

第7回 文献購読

第8回 文献購読

第9回 文献購読

第10回 文献購読

第11回 文献購読

第12回 文献購読

第13回 文献購読

第14回 文献購読

第15回 文献購読

第16回 文献購読

第17回 文献購読

第18回 文献購読

第19回 文献購読

第20回 文献購読

第21回 文献購読

第22回 文献購読

第23回 文献購読

第24回 文献購読

第25回 文献購読

第26回 文献購読

第27回 文献購読

第28回 文献購読

第29回 文献購読

第30回 まとめ

成績評価の方法

文献理解の程度と議論のレベル (100%)

フィードバックの方法

毎回の授業で口頭でフィードバックする。

履修にあたっての注意

特になし

教科書

授業の最初に決める

教科書・参考書に関する備考**参考書****参考ホームページ**

h0361 人間生活学演習 III (4単位 通年)

担当教員：庄井良信

授業のねらい

本演習は、生活者としての子どもの理解と支援に関する臨床教育学的な専門的知識を深めることを目的とする。具体的には、いじめ、暴力、虐待、不登校、生活上・学習支援上の困難など、家庭・学校・地域の発達支援の現場における臨床的な課題について、具体的なケース・カンファレンス（オープンダイアログ様式）に基づいて学び合い、教育臨床に関する深い叡智（フロネシス）の形成を支援する。

到達目標

1. 生活者としての子どもの理解と支援に関する心理学的・教育学的な基礎知識を身につける。
2. 教育・保育現場におけるエピソード記録やドキュメンテーションに基づく語り合いを通して、保育・教育実践の高度な分析力と構想力を修得する。

授業方法

前半は、古典等の文献講読の後に、受講生の問いを傾聴し、課題解決（PBL）型のオープン・ダイアログを行う。後半は、教育・保育実践のエピソード記録やドキュメンテーション等に基づいて、ナラティブ・カンファレンスのワークショップを行う。これは、事例に語られた他者理解・子ども理解に焦点を絞ることを通して、一回性の教育事象の多声的な共同解釈を遂行する学び合いである。

事前事後学修

前半の古典等の講読では、事前・事後学修で活用できるように、ポータルサイト等でハンドアウト資料を提示する。受講生は、事前にそれを読み、予習を行うことを求める。（所要時間は60分程度）。また、後半のカンファレンスでは、エピソード記録又はドキュメンテーションの叙述を求める。（所要時間は60分程度）。

授業計画

- 第1回 演習のオリエンテーション（学びの軌跡と課題生成）
- 第2回 臨床教育学の叡智
- 第3回 子ども理解と学習理論に関する古典講読（1）概要紹介
- 第4回 文献講読：H. Wallonの自我形成論—共存的他者像
- 第5回 文献講読：H. Wallonの精神発達論—表象化の源泉
- 第6回 文献講読：H. Wallonの身体論と情動論
- 第7回 子ども理解に関する古典講読（2）概要紹介
- 第8回 文献講読：L. S. Vygotskyの言語発達論：内言と外言／動的な意味生成システム
- 第9回 文献講読：L. S. Vygotskyの児童学構想：特別支援教育原論
- 第10回 文献講読：L. S. Vygotskyの発達の最近接領域論
- 第11回 文献講読：L. S. Vygotskyの情動体験（perezhivanie）の理論
- 第12回 文献講読：L. S. Vygotskyの芸術心理学
- 第13回 子ども理解の現代的展開としてのオープン・ダイアログ
- 第14回 文献講読：今この瞬間に他者を思いやる
- 第15回 文献講読：他者の他者性を毀損しない対話
- 第16回 文献講読：未来語りのダイアログ
- 第17回 エピソード記録に基づく発達支援のカンファレンス：概論
- 第18回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（1）：乳幼児期の事例1
- 第19回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（2）：乳幼児期の事例2
- 第20回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（3）：小学校低学年の事例1
- 第21回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（4）：小学校低学年の事例2
- 第22回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（5）：小学校中学年の事例1
- 第23回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（6）：小学校中学年の事例2
- 第24回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（7）：小学校高学年の事例1
- 第25回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（8）：小学校高学年の事例2
- 第26回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（9）：思春期・青年期の事例1
- 第27回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（10）：思春期・青年期の事例2
- 第28回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（11）：成人期の事例1
- 第29回 ナラティブ・カンファレンスのワークショップ（12）：成人期の事例2
- 第30回 演習の振り返りとまとめ

成績評価の方法

到達目標1を測定する内容（30%）、到達目標2を測定する内容（30%）授業への参加状況（40%）で評価する。

フィードバックの方法

個別にフィードバックが必要な場合は、ポータルシステム（メール等）を通して、コメントする。演習の中で、随時、エンパワーメント評価を行い、受講生の学修を支援する。事後の質問にメール等で応答し、次回の授業の冒頭でも口頭で応答することで学修を深める。

履修にあたっての注意

学びを通して、相互にケアし合い、希望の物語を紡ぎ直していく演習にしたいと思います。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

演習では、毎回、事前にパワーポイントのハンドアウト（PDF）資料や文献資料を、ポータルサイト等を通じて、配布する。参考書等は、演習の中でも随時紹介する。

参考書

なし

参考ホームページ

h0511 人間生活学特講 III(生活と思想) (4単位 通年)

担当教員：内田博

授業のねらい

社会思想史の観点から貿易に関する思想について検討する。

到達目標

貿易思想におけるフェアトレード論の位置づけを理解し、それを開発教育に役立てることができる。

授業方法

資料の購読と討論、資料は事前に配布する。

事前事後学修

事前配布資料を読んで授業に臨み、事後には、次回の授業との関連を踏まえて、配付資料を再検討すること。(1回あたり各々9.0分程度)

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 アダム・スミスと自由主義の経済学
- 第3回 リカードウの自由貿易主義
- 第4回 マルサスの保護貿易主義
- 第5回 後進国における貿易思想：ドイツ・マンチェスター派
- 第6回 後進国における貿易思想：リストの後進国近代化論
- 第7回 後進国における貿易思想：アメリカ体制派経済学の場合
- 第8回 日本における近代化と貿易：三環節論を中心に
- 第9回 帝国主義と貿易政策
- 第10回 国際経済秩序の展望：国際連盟における戦後秩序の構想
- 第11回 第二次大戦後の国際経済秩序と貿易政策1
- 第12回 第二次大戦後の国際経済秩序と貿易政策2
- 第13回 第二次大戦後の国際経済秩序と貿易政策3
- 第14回 ポスト高度成長期の国際経済秩序と貿易政策1
- 第15回 ポスト高度成長期の国際経済秩序と貿易政策2
- 第16回 ポスト高度成長期の国際経済秩序と貿易政策3
- 第17回 ポスト高度成長期の国際経済秩序と貿易政策4
- 第18回 ポスト高度成長期の国際経済秩序と貿易政策5
- 第19回 新自由主義とフェアトレード論
- 第20回 フェアトレード論の多様性と可能性1
- 第21回 フェアトレード論の多様性と可能性2
- 第22回 フェアトレード論の多様性と可能性3
- 第23回 フェアトレード論の多様性と可能性4
- 第24回 フェアトレード論の多様性と可能性5
- 第25回 フェアトレードの実践：事例研究1
- 第26回 フェアトレードの実践：事例研究2
- 第27回 フェアトレードの実践：事例研究3
- 第28回 フェアトレードの実践：事例研究4
- 第29回 フェアトレードの実践：事例研究5
- 第30回 総括

成績評価の方法

発表100%

フィードバックの方法

授業中の応答

履修にあたっての注意

予習と復習を忘れない

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜指示する

参考書**参考ホームページ**

h0611 人間生活学特講 IV(生涯発達と学習) (4単位 後期)

担当教員：新川貴紀

授業のねらい

現代の教育において、生涯発達・生涯学習という観点は重要なものとなっている。また、近年の心理学では、社会生活や人間関係を通して行われる学習に対する関心が高まっている。本講義では、人間は生涯を通じて学び続ける生活者であり、同時に社会的存在であるという考え方について、実証的なデータに基づく生涯発達心理学や学習心理学の知見から探求する。研究成果についての理解を深めるとともに、そうした知識を生産するための研究方法についても、学びを深めることとする。

到達目標

生涯発達心理学や学習心理学の基礎的な理論や概念を習得すること。学習・発達の支援に関わる心理学をより深く扱い、各自の専門分野における研究や実践への活用について示唆を得ること。人間の社会生活や心理状態について、客観的な研究を行う方法について習熟すること。

授業方法

人間の生涯にわたる発達の過程、および生活を支える知識を学習するしくみについて、実験や調査・観察などの実証的研究による知見を基に考察する。発達心理学・学習心理学に関する研究論文を読む力を養うことも併せて目的とするため、研究法や心理統計の基礎についても扱う。

事前事後学修

講義の事前・事後に必要な作業は講義中に適宜指示する（所要時間60分程度）。

授業計画**第1回 <前半>**

オリエンテーション：前半の授業の目的と進め方の提案と協議

第2回 生涯発達心理学の基礎理論**第3回** 生涯発達心理学の応用理論**第4回** 学習心理学の基礎理論**第5回** 学習心理学の応用理論**第6回** 発達・学習心理の量的研究法**第7回** 発達・学習心理の質的研究法**第8回** 心理学の研究論文を読むための基礎的知識**第9回** 心理学の研究論文を読む上での留意点**第10回** 幼児期の発達・学習心理学の研究**第11回** 児童期の発達・学習心理学の研究**第12回** 青年期の発達・学習心理学の研究**第13回** 成人期の発達・学習心理学の研究**第14回** 老年期の発達・学習心理学の研究**第15回** 前半総括**第16回 <後半>**

オリエンテーション：後半の授業の目的と進め方の提案と協議

第17回 発達・学習の心理的支援（1）：カウンセリング基礎理論**第18回** 発達・学習の心理的支援（2）：カウンセリング実践的技法**第19回** 発達・学習の心理的支援（3）：行動療法の基礎理論**第20回** 発達・学習の心理的支援（4）：行動療法の実践的技法**第21回** 発達・学習の心理的支援（5）：認知療法の基礎理論**第22回** 発達・学習の心理的支援（6）：認知療法の実践的技法**第23回** 対人関係の発達と学習（1）：対人関係の諸問題**第24回** 対人関係の発達と学習（2）：対人関係の支援**第25回** 心理的健康の心理教育（1）：基礎理論**第26回** 心理的健康の心理教育（2）：実践的演習**第27回** 心理的健康の心理教育（3）：総括**第28回** ストレス対処の心理教育（1）：基礎理論**第29回** ストレス対処の心理教育（2）：実践演習**第30回** 総括**成績評価の方法**

授業への参加状況：80%、授業に関する課題（研究論文のレポートなど）：20%

フィードバックの方法

受講者に個別に行う。

履修にあたっての注意

受講者の方の興味・関心と照らし合わせながら、授業の詳細な内容や方法は調整していきたいと考えています。実証的な社会科学研究を理解・実施するための基礎を身につけると、臨床心理学的な人間理解や対人援助の基礎を体験することを副次的な目的としています。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考書：授業中に適宜紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h0711 人間生活学特講 V(子どもと社会) (2単位 通年)

担当教員：木脇奈智子

授業のねらい

この授業の目的は「子どもを育てるのは誰なのか」をテーマに、社会・地域コミュニティ・家族・ジェンダーをキーワードとして次世代育成のあり方について考えることにある。

到達目標

1. 子育てと社会についての歴史、今日的課題諸外国における子育ての社会化について理解することができる。
2. 次世代育成について社会構造的にとらえる視点を持つことができる。

授業方法

講義およびゼミ形式。文献講読を含め、受講生の興味とすり合わせをし、意見交換を交えながら進める。ゲストスピーカーの招聘やフィールドワークも適宜考える。

事前事後学修

事前事後指導として、文献読解とそのまとめが多くなる。指定された頁を読んでくること。事後はそれらをまとめておくこと。(所要時間 60 分程度)

授業計画

- 第1回 「子どもの誕生」(アリエス)
- 第2回 子ども研究の歴史(近代家族以前)
- 第3回 子ども研究の歴史(近代家族における子ども・子育て)
- 第4回 子どもと人口政策(1) 戦前、戦後の人口政策
- 第5回 子どもと人口政策(2) 諸文化における人口政策
- 第6回 少子社会と子ども(1) 子ども中心社会と少子化
- 第7回 少子社会と子ども(2) 子育て支援とは
- 第8回 少子社会と子ども(3) 子育てとジェンダー
- 第9回 少子社会と子ども(4) 子育てとジェンダー
- 第10回 子育ての比較社会学(1) アメリカ
- 第11回 子育ての比較社会学(2) 北欧
- 第12回 子育ての比較社会学(3) アジア
- 第13回 生殖医療と子ども(1)
- 第14回 生殖医療と子ども(2)
- 第15回 少子社会はとまらないのか

成績評価の方法

毎回の授業で課する到達目標を測定する事前・事後課題(70%)、および学期末に行う到達目標2を測定するためのレポート(30%)により評価する。

フィードバックの方法

授業の内外でコメントします。

履修にあたっての注意

日程は受講生と相談します。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考**参考書**

子どもが忌避される時代 本田和子 新曜社
 男の育児・女の育児 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 昭和堂
 アジアの家族とジェンダー 落合恵美子ほか 勁草書房

参考ホームページ

h0811 人間生活学特講 VI(子どもと教育) (2単位 通年)

担当教員：庄井良信

授業のねらい

学習指導及び生徒指導・教育相談・キャリア教育の基礎となる知識を修得し、複雑な事例に柔軟に対応できる臨床的実践力を高めることを目的とする。授業では、学校教育の現場における現代的課題を、C・R・ロジャーズ、L・S・ヴィゴツキー、H・ワロンなどの発達援助理論を参照しつつ考察する。その際、この講義で取り上げる基礎理論は、すべて臨床的な実践事例と結びつけて協働省察する。

また、毎回の講義では、問題提起の後に、受講生の経験を傾聴し合う協働学習（ナラティブ・ラーニング）を採用し、理論や概念の理解を深め、学修者のオリジナルな問いの生成を支援する。

到達目標

- 1 学習指導の基礎理論とそれに基づく臨床的な支援・指導に関する深い教養を獲得する。
- 2 実践経験のエピソード事例にもとづくオープンダイアログの技法を修得する。
- 3 生徒指導・教育相談・キャリア教育の思想と方法を問い直し、より高度な専門的力量を獲得する。
- 4 心理職・福祉職等の地域援助職と学校教育との互恵的連携と組織化の可能性について「チームとしての学校」を構想し、実践し、評価・改善するための高度な力量を高める。

授業方法

授業は、具体的な事例に基づく問題提起（講義形式）の後に、受講生の問いを傾聴し、課題解決型のオープン・ダイアログの形式で行う。講義は、学校教育現場におけるコンサルテーションに関する実務経験も生かして行う。受講生には、毎回の講義の最後に、15分程度で講義の振り返りと問いの生成に関する400字程度のリフレクション・ノート提出してもらい、次の講義のはじめに回答する。その際、必要に応じてテーマを絞ったディスカッションを行う。

事前事後学習

毎回の講義では、事前・事後学習で活用できるように、グレクサ等でハンドアウト資料を提示する。受講生は、事前にそれを閲覧し、予習を行うことを求める。また、講義で紹介した参考資料は、事後に各自で読書ノートとして記録することを求める。（合計の所要時間は45分から90分程度）必要な文献を事前に読むことを求め、事後に質問やコメントをメール等で送付することを求める。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 学習指導及び生徒指導の臨床的認識論（clinical epistemology）とナラティブ・アプローチ
- 第3回 臨床教育学における学びの基礎理論（1）一物語共同体（narrative community）という学びの淵源
- 第4回 臨床教育学における学びの基礎理論（2）一拡張による学習（expansive learning）
- 第5回 臨床教育学における学びの基礎理論（3）一ナラティブ・ラーニング（narrative learning）の試み
- 第6回 学習指導における社会情動的スキル再考（1）：ロジャーズのカウンセリング理論
- 第7回 学習指導における社会情動的スキル再考（2）：ヴィゴツキーの発達援助理論
- 第8回 学習指導における社会情動的スキル再考（3）：ワロン（Henri Wallon）の発達援助理論
- 第9回 多様な学びのニーズへの対応（1）：フィンランドの教育政策と学習の基礎理論
- 第10回 多様な学びのニーズへの対応（2）：フィンランドのオープン・ダイアログ理論
- 第11回 多様な学びのニーズへの対応（3）：フィンランドの特別支援教育システム理論
- 第12回 保幼小の連携・接続の基礎理論とカリキュラム開発（1）：遊びと学びの弁証法
- 第13回 保幼小の連携・接続の基礎理論とカリキュラム開発（2）：アプローチカリキュラムの検討
- 第14回 保幼小の連携・接続の基礎理論とカリキュラム開発（3）：スタートカリキュラムの検討
- 第15回 多職種協働のシステム構築と「チームとしての学校」の構想

成績評価の方法

講義後に提出されるリフレクション・ノート（30%）学期末に行うテキスト形式のレポート（70%）により評価する。

フィードバックの方法

講義後に提出されるリフレクション・ノートでの問いについては、次の授業の冒頭で回答する。期末のレポート課題については、採点後に答案を返却する。講義後の質問やコメントに回答し、次の授業の冒頭でも口頭でも回答し、対話的な学びの質を深める。

履修にあたっての注意

子ども理解を深め、その学びを支援する臨床教育学に関心のある受講生を歓迎する。

教科書

問いからはじめる教育学 勝野正章・庄井良信 有斐閣 2015 978-4641150140

教科書・参考書に関する備考

講義では、毎回、事前にパワーポイントのハンドアウト（PDF）資料や文献資料を、ポータルサイト等を通じて、配布する。参考書等は、講義の中でも随時紹介する。

参考書

なし

参考ホームページ

h1101 生活環境学特講 I(都市環境論 I) (2単位 前期)

担当教員：田中宏実

授業のねらい

本講義では、生活者の視点から考えることを基本に、住まいの地域性、子どもが育つ環境づくり、まちづくりなどのテーマを提示し、現代の住環境の課題と解決策について学ぶことを目的とする。

到達目標

- 1 現代社会の住環境の課題を見出すことができる。
- 2 これからの住環境について提言ができるようになる。

授業方法

各テーマについて講義と討論および体験活動を行い理解を深める。事前・事後学習として関連書籍や事例について研究した内容をまとめ、講義時間内に発表してもらう場合がある。

事前事後学習

事前学習として興味関心に関連付けて発表するための課題を出す。事後学習としてレポート課題を出し提出を求める。各所要時間は30分～1時間程度。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
 第2回 住宅の地域性 1) 日本の住まい
 第3回 住宅の地域性 2) 北海道の住まい
 第4回 住宅の地域性 3) 世界の住まい
 第5回 子どもと住まい 1) 子どもと環境の関係性
 第6回 子どもと住まい 2) 子どもをめぐる住環境づくり
 第7回 子どもと住まい 3) 子どもの参画
 第8回 まちづくり 1) まちづくりの意味
 第9回 まちづくり 2) 住民参加
 第10回 まちづくり 3) 都市計画
 第11回 まちづくり 4) まちづくりの事例見学
 第12回 住環境現問題の現状把握 1) 建築作品もしくは住民参加の事例の見学と討議
 第13回 住環境現問題の現状把握 2) 建築作品もしくは住民参加の事例の見学と討議
 第14回 住環境現問題の現状把握 3) 建築作品もしくは住民参加の事例の見学と討議
 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標1、2を測定するために、事前・事後学習の課題(30%)、学期末に行うレポート(50%)、参加態度(20%)により評価する。

フィードバックの方法

課題発表やレポート課題に対する解説を行い、興味関心のある研究テーマと関連付けるようにする。

履修にあたっての注意

授業は講義形式および体験活動を組み合わせて行う。指示された事前・事後学習を行い、問題意識を持ち、主体的に参加すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜資料を配布する。
参考書は講義で指示する。

参考書

なし

参考ホームページ

h1201 生活環境学特講 II(都市環境論 II) (2単位 後期)

担当教員：田中宏実

授業のねらい

現代社会における都市環境と人間生活に関わる課題について探求するため、文献や研究論文の購読および体験や事例見学等を通して理解を深める。さらに現代社会の課題に対する解決策を提案できる力を養うことを目指す。

到達目標

1. 住環境形成、まちづくり、住教育に関して、最新の研究や事例について学び分析する方法について知る。
2. 次世代に受け継ぐべき住環境についてのデザインや方法などについて計画を立て、プレゼンテーションする能力を習得する。

授業方法

講義形式と受講者の報告・レポートおよび討論を通じて、主題を理解し把握することができ、かつ自己能力を高めるために、積極的に事前、事後課題に取り組んでもらう。

事前事後学修

事前学修として興味関心に関連付けて発表するための課題を出す。事後学修としてレポート課題を出し提出を求める。各所要時間は30分～1時間程度。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 住環境形成とは
- 第3回 まちづくりとは
- 第4回 住教育とは
- 第5回 最新の研究論文の分析と発表と討論（住環境形成）
- 第6回 最新の研究論文の分析と発表と討論（まちづくり）
- 第7回 最新の研究論文の分析と発表と討論（住教育）
- 第8回 事例研究：研究の紹介と発表分析（住環境形成）
- 第9回 事例研究：研究の紹介と発表分析（まちづくり）
- 第10回 事例研究：研究の紹介と発表分析（住教育）
- 第11回 計画立案（資料の収集）
- 第12回 計画立案（計画案づくり）
- 第13回 実践1（計画案の実践を試みる）
- 第14回 実践2（実践結果について分析する）
- 第15回 総括（討論）

成績評価の方法

授業・演習での意見表明や取り組み（30%）、各自の報告およびレポート（70%）により評価する。

フィードバックの方法

授業時間内に課題発表やレポート課題に対するコメントを行い評価のポイントを示す。興味関心のある研究テーマと関連付けるようにする。

履修にあたっての注意

講義室を離れて、実際の現場見学や現場で専門職との意見交換などもあるので、履修時間の変更もありうる。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考書については、必要に応じて随時指示する。

参考書**参考ホームページ**

h1301 生活環境学演習 I (4単位 通年)

担当教員：田中宏実

授業のねらい

現代社会における都市環境のあり方について探求するため、学術論文や専門書を精読し理解を深める。住まいをめぐる諸問題を解決していくための研究の進め方について学び、今後の課題について詳しく探求する。

到達目標

- 1、建築・都市と生活環境に関わる現代的課題を発見できる。
- 2、建築・都市と生活環境に関わる研究体系について理解している。
- 3、1と2を通して得られた知識を自らの研究に応用することができる。

授業方法

文献購読をもとに資料を作成し、意見交換をしながら進める。
随時、事前事後学習のための課題を指示する。

事前事後学修

事前学修として興味関心に関連付けて発表するための課題を出す。事後学修としてレポート課題を出し提出を求める。各所要時間は30分～1時間程度。

授業計画

- 第1回 ガイダンス（演習の進め方について）
- 第2回 建築・都市と生活環境に関わる研究についての概説
- 第3回 学術論文「建築計画分野」(1)の紹介と討論
- 第4回 学術論文「建築計画分野」(2)の紹介と討論
- 第5回 学術論文「建築計画分野」(3)の紹介と討論
- 第6回 学術論文「都市計画分野」(1)の紹介と討論
- 第7回 学術論文「都市計画分野」(2)の紹介と討論
- 第8回 学術論文「都市計画分野」(3)の紹介と討論
- 第9回 学術論文「住教育分野」(1)の紹介と討論
- 第10回 学術論文「住教育分野」(2)の紹介と討論
- 第11回 学術論文「住教育分野」(3)の紹介と討論
- 第12回 学術論文「住教育分野」(4)の紹介と討論
- 第13回 研究の到達点とこれからの研究課題について：発表
- 第14回 研究の到達点とこれからの研究課題について：討論
- 第15回 研究倫理と研究方法について
- 第16回 研究の目的をたてる
- 第17回 研究方法について考える
- 第18回 研究計画を立てる
- 第19回 研究計画発表準備をする
- 第20回 研究計画について発表する
- 第21回 調査をする
- 第22回 調査データを分析する
- 第23回 分析したデータをまとめる
- 第24回 調査結果を発表する
- 第25回 専門書の輪読1（調査方法）
- 第26回 専門書の輪読1（建築計画）
- 第27回 専門書の輪読2（都市計画（1））
- 第28回 専門書の輪読3（都市計画（2））
- 第29回 専門書の輪読4（住教育）
- 第30回 総括

成績評価の方法

作成資料（20%）、発表内容（30%）、質疑応答（30%）、授業への参加状況（20%）で評価する。

フィードバックの方法

課題発表やレポート課題に対する評価のポイントを伝える。興味関心のある研究テーマと関連付けるようにする。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜、資料を配布します。参考文献は講義で紹介します。

参考書**参考ホームページ**

h1401 生活環境学特講 III(生活環境論) (4単位 通年)

担当教員：松島肇

授業のねらい

多くの人々が、生活を取り巻く自然環境の重要性を漠然と認識しているが、なぜ重要であるかを論理的に説明することは案外難しい。本講では、様々な視点から生活と環境との関連について学び、科学的なエビデンスをもとに人間社会が自然環境と持続的な関係性を構築するためになすべきことを考える力を身に付けることを目指す。

到達目標

1. 生活と環境に関する幅広い知識を身につける。
2. エビデンスに基づく科学的視点から情報を収集・分析する力を身につける。
3. 自身の意見を論理的にまとめ発表する力を身につける。

授業方法

講義は生活環境に関する10のテーマを3回に分けて、「講義」、「資料の解析」、「ディスカッション」、を行う。「講義」ではテーマの概念や現状の課題について知識を深めることを目指す。「資料の解析」では各自でテーマに関連する事例や文献を収集し、科学的な視点からそれらを解析する手法について解説する。「ディスカッション」では、自身が収集した資料の解析結果をエビデンスに基づき論理的にプレゼンテーションを行い、その内容について講師とディスカッションを行い、理解を深める。テーマによってはフィールドワークにより現地でデータを収集する。最終的に、北海道における身近な生活環境に関する課題を選び、その解決策を提案する。

事前事後学修

各テーマについて、各自で資料の収集・解析・まとめを行う必要があり、そのための時間が必要である（各テーマにつき3時間程度）。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 講義の進め方と生活環境の概要
- 第2回 地球温暖化と生活環境 (1) 概念と課題
- 第3回 地球温暖化と生活環境 (2) 文献による事例調査
- 第4回 地球温暖化と生活環境 (3) 議論とまとめ
- 第5回 人口増加と環境負荷 (1) 概念と課題
- 第6回 人口増加と環境負荷 (2) 文献による事例調査
- 第7回 人口増加と環境負荷 (3) 議論とまとめ
- 第8回 エコシステムサービス (1) 概念と課題
- 第9回 エコシステムサービス (2) 文献による事例調査
- 第10回 エコシステムサービス (3) 議論とまとめ
- 第11回 再生可能エネルギーの光と影 (1) 概念と課題
- 第12回 再生可能エネルギーの光と影 (2) 文献による事例調査
- 第13回 再生可能エネルギーの光と影 (3) 議論とまとめ
- 第14回 食糧問題と資源管理 (1) 概念と課題
- 第15回 食糧問題と資源管理 (2) 文献による事例調査
- 第16回 食糧問題と資源管理 (3) 議論とまとめ
- 第17回 エシカル消費のススメ (1) 概念と課題
- 第18回 エシカル消費のススメ (2) 文献による事例調査
- 第19回 エシカル消費のススメ (3) 議論とまとめ
- 第20回 人口減少とグリーンインフラストラクチャー (1) 概念と課題
- 第21回 人口減少とグリーンインフラストラクチャー (2) 文献による事例調査
- 第22回 人口減少とグリーンインフラストラクチャー (3) 議論とまとめ
- 第23回 生活環境と観光 (1) 概念と課題
- 第24回 生活環境と観光 (2) 文献による事例調査
- 第25回 生活環境と観光 (3) 議論とまとめ
- 第26回 環境を測る (1) 様々な環境指標の概説
- 第27回 環境を測る (2) 現地でのデータ収集
- 第28回 環境を測る (3) データ分析とまとめ
- 第29回 まとめ (1) 北海道における生活環境の課題
- 第30回 まとめ (2) 課題解決策の提案報告

成績評価の方法

各テーマに関する発表の内容から3つの到達目標を評価する。各テーマについて10%とし、10のテーマの合計で評価する。

フィードバックの方法

各テーマのまとめの際に評価をその場で伝える。また、適時メール等で質問に対応する。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜、講義内で資料を配布する。

参考書

決定版！グリーンインフラ グリーンインフラ研究会・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング・日経コンストラクション編 日経BP社 2017 978-4-8222-3522-2
 地球環境辞典 丹下博文 中央経済社 2019 978-4-502-29801-1
 最新環境百科 松田裕之、秋庭はるみ、戎谷舞子、木村久美子、桜井良 監訳 丸善出版 2016 978-4-621-30001-5
 実践版！グリーンインフラ グリーンインフラ研究会・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング・日経コンストラクション編 日経BP社 2020 978-4-296-10675-2

参考ホームページ

h1511 生活環境学演習 III (4単位 通年)

担当教員：岡崎由佳子

授業のねらい

食生活と健康、および食物学研究関連の実験研究に関わる学術論文と専門書を精読し、新しい情報を習得するとともに、特別研究の進め方や、今後の課題について検討を行う。

到達目標

- 1 研究テーマに関わる学術論文と専門書の内容をを分かりやすく解説することができる。
- 2 論文と専門書の精読を通して得た知識を、自らの研究テーマに応用することができる。

授業方法

レジュメおよびパワーポイントを用いて、学術論文の紹介と研究の進捗状況について発表を行ってまいります。発表後のディスカッションを通して、研究の方向性や研究遂行上の課題について確認します。

事前事後学修

受講者には毎回、レジュメ作成や研究発表の準備に関する事前・事後課題を出します（所要時間 180 分程度）。

授業計画

- 第1回 演習の進め方に関する諸説明
- 第2回 学術論文の紹介と討論 (1) 糖質代謝
- 第3回 学術論文の紹介と討論 (2) 脂質代謝
- 第4回 学術論文の紹介と討論 (3) タンパク質代謝
- 第5回 学術論文の紹介と討論 (4) ビタミン
- 第6回 学術論文の紹介と討論 (5) 無機質
- 第7回 学術論文の紹介と討論 (6) 食物繊維
- 第8回 学術論文の紹介と討論 (7) オリゴ糖
- 第9回 学術論文の紹介と討論 (8) ポリフェノール
- 第10回 学術論文の紹介と討論 (9) 腸管免疫
- 第11回 学術論文の紹介と討論 (10) 腸管バリア
- 第12回 学術論文の紹介と討論 (11) 腸内細菌叢
- 第13回 学術論文の紹介と討論 (12) プロバイオティクスとプレバイオティクス
- 第14回 学術論文の紹介と討論 (13) 発酵食品
- 第15回 学術論文の紹介と討論 (14) 非アルコール性脂肪肝
- 第16回 「研究倫理」について－「藤女子大学研究倫理基準」の内容を理解する
- 第17回 研究テーマと研究計画 (1) 研究目的の検討
- 第18回 研究テーマと研究計画 (2) 研究方法の検討
- 第19回 研究テーマと研究計画 (3) 実験方法の検討
- 第20回 研究テーマと研究計画 (4) プレゼンテーション資料の作成
- 第21回 研究テーマと研究計画の発表
- 第22回 専門書の輪読 (1) 消化・吸収
- 第23回 専門書の輪読 (2) 小腸の働き
- 第24回 専門書の輪読 (3) 大腸の働き
- 第25回 専門書の輪読 (4) 肝臓の働き
- 第26回 専門書の輪読 (5) 肝臓での脂質代謝
- 第27回 専門書の輪読 (6) 炎症と栄養
- 第28回 専門書の輪読 (7) 時間栄養学
- 第29回 研究の進捗状況の報告
- 第30回 論文作成の準備

成績評価の方法

到達目標 1 と 2 を測定する発表内容 (50%) および、議論と理解度 (50%) により評価します。

フィードバックの方法

毎回の課題については、講義内に口頭で解説し、内容に応じて資料を配布します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考**参考書****参考ホームページ**

h1701 生活環境学特講 V(人間生活と食文化) (2単位 後期)

担当教員：岡崎由佳子

授業のねらい

食文化や食習慣の観点から、食べ物と体との相互作用、すなわち栄養という現象を学び、食生活の多様性について学習することが本講義の目的である。またこの過程を通じて、食生活の今日的課題と改善の方法を検討する。

到達目標

- 1 講義で取り上げるテーマについて、自分の考えを述べることができる。
- 2 現代の食生活における課題を見出し、討論することができる。

授業方法

栄養素の働きについて理解した上で、我が国における各栄養素の摂取状況と諸外国における摂取状況を比較・検討し、食文化や食習慣が栄養素の摂取に及ぼす影響について考究します。食生活の今日的課題について、学術雑誌から話題を取り上げて受講者同士でディスカッションを行い、今後への対応を考察します。

事前事後学修

受講者には毎回、栄養学に関する事前・事後学習を出します（所要時間 40 分程度）。

授業計画

第 1 回 オリエンテーション

第 2 回 栄養学の歴史－研究の背景と食文化との関わり－

第 3 回 糖質の働きと各国の摂取状況

第 4 回 タンパク質の働きと各国の摂取状況

第 5 回 脂質の働きと各国の摂取状況

第 6 回 無機質の働きと各国の摂取状況

第 7 回 ビタミン発見の歴史と食文化との関わり

第 8 回 機能性成分の摂取状況と食文化との関わり

第 9 回 出汁の文化と役割

第 10 回 食生活と仏教との関わり（精進料理について）

第 11 回 食生活と健康との関わり

第 12 回 食生活の課題について、学術雑誌から話題を取り上げ、討論し、今後への対応を考察する。(1) 日本家政学会誌の論文から

第 13 回 食生活の課題について、学術雑誌から話題を取り上げ、討論し、今後への対応を考察する。(2) 食生活学会誌の論文から

第 14 回 食生活の課題について、学術雑誌から話題を取り上げ、討論し、今後への対応を考察する。(3) Journal of Nutrition の論文から

第 15 回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1 と 2 を測定する討論内容 (50%) および、課題レポート (50%) により評価する。

フィードバックの方法

毎回の課題については、講義内に口頭で解説し、内容に応じて資料を配布します。

質問については、次回の講義で資料を用いて口頭で回答します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

教科書：使用しない。テーマごとに必要な資料を配布する。

参考書：適宜指示する。

参考書**参考ホームページ**

h1801 生活環境学特講 VI(人間生活と衣文化) (2単位 後期)

担当教員：長尾順子

授業のねらい

服飾に関する文化的事象を学び、衣生活の多様性について学習することを目的とする。

到達目標

- 1 講義で取り上げるテーマについて、自分の考えを述べるができる。
- 2 講義内容をもとに、衣文化に関する課題を自ら設定し、まとめることができる。

授業方法

主に講義形式でおこないます。受講者による発表は、各自が興味のある服装要素をひとつとり上げ、今日の洋服にどう繋がっているかを調べ、発表してもらいます。

事前事後学修

受講者には、毎回講義内容に関する事前・事後学習を出します（所要時間 60 分程度）。

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 衣生活をとりまく諸事象について
- 第3回 衣文化 (1) ヨーロッパ
- 第4回 衣文化 (2) 日本
- 第5回 衣文化 (3) ヨーロッパと日本の比較
- 第6回 個人発表(1) 文化
- 第7回 技術 (1) ヨーロッパ
- 第8回 技術 (2) 日本
- 第9回 技術 (3) ヨーロッパと日本の相違点
- 第10回 個人発表(2)技術
- 第11回 学術雑誌の討論(1)歴史・文化に関するもの
- 第12回 学術雑誌の討論(2)技術に関するもの
- 第13回 学術雑誌の討論(3)自分のテーマに関するもの
- 第14回 個人発表 (3) 自分のテーマ
- 第15回 まとめ

成績評価の方法

到達目標 1、2 を測定する課題への取り組み (50%)、各自のテーマ発表 (50%) により評価します。

フィードバックの方法

課題や発表内容について、講義内に口頭で解説します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

テーマごとに必要な資料を配布する。

参考書**参考ホームページ**

h2101 生活福祉学特講 I(障害と福祉 I) (2単位 前期)

担当教員：若狹重克

授業のねらい

・少子高齢社会は、所得、医療、介護保障など生活の根幹に関わる主要システムの見直しに大きく影響しています。その中で、生活に何らかの「障害」を有する高齢者のための社会保障制度・施策の体系について、改革動向と今後の展望や課題について検討します。

到達目標

・少子高齢社会における社会保障制度等の課題について説明することができる。
 ・各種システムの見直しが高齢者の生活に及ぼす影響を踏まえ、種々の課題を克服しながら「生活を再構築」していく視点からその支援のありかたを検討し、「支援システム」について論ずることができる。

授業方法

前半は、高齢者をめぐる社会保障の動向について資料の解説を中心に進める。後半は、文献講読を中心に進める。

事前事後学修

事前・事後学習（各2時間程度）はシラバスを参照し講義内容に関係する文献・資料等を確認しておくことを求めます。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 高齢者の各種制度・施策の系譜と体系（1）：戦後～1980年代
- 第3回 高齢者の各種制度・施策の系譜と体系（2）：1990年代以降
- 第4回 社会保障構造改革と社会福祉基礎構造改革
- 第5回 所得保障と年金制度
- 第6回 高齢者医療制度
- 第7回 介護保険制度（1）：制度創設の背景と目的
- 第8回 介護保険制度（2）：法改正の過程と概要
- 第9回 地域包括ケアシステムとは
- 第10回 現代社会における支援の意義
- 第11回 支援の本質（1）：援助とケア
- 第12回 支援の本質（2）：支え合いと支援行為
- 第13回 支援システムとは
- 第14回 支援システムの構築
- 第15回 総括

成績評価の方法

参加状況（40%）、到達目標に関するレポート（60%）により評価する。

フィードバックの方法

提出されたレポートについては、総括の際返却し助言します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜資料を配布する。
 参考書は講義で紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2201 生活福祉学特講 II(障害と福祉 II) (2単位 後期)

担当教員：若狹重克

授業のねらい

支援や環境調整を要する高齢者・障害者・障害児に対する各種のサービスのあり方を考究する。近年、在宅サービス重視の政策誘導が進む中で在宅サービスは多様化しているが、ニーズに対する適合性は絶えず検証する必要がある。他方、施設サービスの機能再編も進行中であり、施設機能の再評価は今日的課題である。こうした観点から障害者（児）の障害像や概念を確認しつつ、サービスの現状や問題と、課題について検討する。

到達目標

- ・障害像および障害の概念の変遷を説明できる。
- ・障害児（者）施策の動向や、地域生活移行及び環境調整の方法を論じることができる。
- ・支援のあり方や包括的ケア及びマネジメントの要件を論じることができる。

授業方法

授業形式で、障害者施策の動向を概観したのち、障害の概念、障害者の就労、障害者権利条約の問題提起、地域生活移行や、特別支援学校の現状と課題等について学習する。毎回、各講のテーマに関する討議を行い、障害福祉の諸相について専門的な理解を深める。

事前事後学修

授業終了時に復習・確認してほしいポイント（1時間程度）、ならびに次回の授業テーマと予習・事前学習事項（2時間程度）を指示する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション ～ 障害者施策の動向
- 第2回 障害像と障害の概念
- 第3回 ケア・支援の指向性（地域生活と自立）
- 第4回 障害者のためのサービスマネジメントの課題
- 第5回 就労支援と社会資源
- 第6回 就労支援と福祉的就労
- 第7回 障害と生活課題
- 第8回 障害者支援施策と関連法制度
- 第9回 在宅サービスと施設サービスの特性
- 第10回 地域生活移行の要件
- 第11回 地域生活移行と施設・行政の役割
- 第12回 地域生活移行の現状と課題
- 第13回 特別支援学校と障害者福祉
- 第14回 包括ケアの意義と環境調整
- 第15回 総括

成績評価の方法

報告・レポート発表（50%）、授業への参加状況（50%）、により評価する。

フィードバックの方法

提出されたレポートについては、総括の際に返却し助言する。

履修にあたっての注意

指示された事前・事後学習を行い、主体的に討議に参加すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

各回のテーマに関する資料・データを配付し、事前に参考文献等を紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2301 生活福祉学演習 I (4 単位 通年)

担当教員：若狭重克

授業のねらい

高齢者ケア改革の動向を踏まえ、今日の課題である「地域包括ケアシステム」の考え方や課題について理解する。また、その関連での高齢者に対するソーシャルワークの変容について把握するとともに、わが国の「地域ケアシステムとケアマネジメント」のあり方について検討する。

到達目標

- ・わが国における高齢者ケア改革の特徴について説明できる。
- ・介護保険制度の導入を境とした高齢者に対するソーシャルワークの変容について説明できる。
- ・「地域包括ケアシステム」構築におけるソーシャルワークの課題を指摘できる。

授業方法

講義及び文献購読、資料・事例検討によって進めます。また、報告と討議の機会も設けます。

事前事後学修

予め文献や資料を提供するので、事前学習（2 時間程度）として読んでおくことを求めます。また、事後学習（1 時間程度）で内容の補足を求めます。

授業計画

- 第 1 回 前期オリエンテーション（研究倫理を含む）
- 第 2 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（1）：戦後の高齢者をめぐる状況と老人福祉法制定
- 第 3 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（2）：老人医療費無料化と老人保健法
- 第 4 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（3）：ゴールドプランと福祉関係 8 法改正
- 第 5 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（4）：新ゴールドプランから介護保険制度創設
- 第 6 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（5）：介護保険制度の実施とその思想
- 第 7 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（6）：介護保険のめざすシステム構築
- 第 8 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（7）：介護保険とケアマネジメント
- 第 9 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（8）：高齢者の自立支援
- 第 10 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（9）：2005 年改正介護保険の概要
- 第 11 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（10）：地域包括ケア
- 第 12 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（11）：2011 年及び 2014 年改正介護保険法
- 第 13 回 わが国の高齢者ケア改革の特徴（12）：地域包括ケアシステムから地域共生社会へ
- 第 14 回 地域包括ケアの実際（1）：資料分析
- 第 15 回 地域包括ケアの実際（2）：実践事例検討
- 第 16 回 後期オリエンテーション
- 第 17 回 ソーシャルワークから見た高齢者ケア改革（1）：介護保険制度実施まで
- 第 18 回 ソーシャルワークから見た高齢者ケア改革（2）：介護保険制度実施以降
- 第 19 回 高齢者の自立支援とソーシャルワーク（1）：高齢者保健福祉の理念と「自立」
- 第 20 回 高齢者の自立支援とソーシャルワーク（2）：「自立支援」とは何か
- 第 21 回 高齢者の自立支援とソーシャルワーク（3）：「自立支援」とケアマネジメント
- 第 22 回 地域ケアの理念
- 第 23 回 地域ケアと地域福祉
- 第 24 回 高齢者の長期ケアと地域ケアシステム
- 第 25 回 地域包括ケアシステム（1）：2015 年の高齢者介護から
- 第 26 回 地域包括ケアシステム（2）：地域包括ケア研究会報告から
- 第 27 回 地域福祉と地域包括ケア
- 第 28 回 地域包括支援センターの実際（1）：ケアマネジメントと地域包括ケア
- 第 29 回 地域包括支援センターの実際（2）：地域におけるソーシャルワークの課題
- 第 30 回 総括

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、到達目標に関するレポート（60%）により評価する。

フィードバックの方法

報告と討議については、授業の中で適宜助言します。また、提出されたレポートは総括の際に返却し、助言します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜資料を配布する。

参考文献は講義で紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2401 生活福祉学特講 III(医療と福祉) (4単位 通年)

担当教員：小沼春日

授業のねらい

前期は高齢者や障がい者の地域生活支援の課題をテーマとして、疾病と障がいの理解を深めるとともに、福祉と医療の様々なアプローチのあり方を検討します。また、福祉と医療のネットワークの実際について、国内外の先進事例の検討を行います。後期は高齢社会における福祉課題をテーマとして、サービスや支援に係る政策アプローチのあり方を検討します。また、援助の継続性、計画性、評価などの要件を確認するとともに、制度運用ならびに福祉サービスの展開について理解を深めます。

到達目標

- ・疾患や障がいの特性を理解する。
- ・医療と福祉の連携やサービス調整およびリハビリテーションの考え方や方法を理解する。
- ・高齢者施策の制度運用やサービス展開に係る方法論を理解する。

授業方法

前期は小沼、後期は若狭が担当します。講義に加え、文献講読・資料検討・報告と討議を合わせて進めます。報告と討議については、授業内に教員が助言します。

事前事後学修

随時、事前・事後の学習課題（各1時間程度）を指示します。

授業計画

第1回 [前期：小沼が担当]

前期計画のオリエンテーション

第2回 わが国の少子高齢社会の動向

第3回 疾患と障がいの理解

第4回 障がい者の自立と支援施策の動向

第5回 障がい者の地域生活支援 1) 統合失調症の理解と地域生活支援

第6回 障がい者の地域生活支援 2) 自閉症の特性理解と地域生活支援

第7回 高齢者の福祉・医療施策の動向

第8回 福祉・医療ニーズを持つ高齢者の地域生活支援 1) 認知症高齢者の地域生活支援

第9回 福祉・医療ニーズを持つ高齢者の地域生活支援 2) 終末期ケア（バリアティブケア）

第10回 先進事例の検討 1) 福祉・医療のネットワーク（国内：A地域）

第11回 先進事例の検討 2) 福祉・医療のネットワーク（国内：B地域）

第12回 先進事例の検討 3) バリアティブケア（アメリカ：A事例）

第13回 先進事例の検討 4) バリアティブケア（アメリカ：B事例）

第14回 先進事例の検討 5) バリアティブケア（アメリカ：C事例）

第15回 まとめ

第16回 [後期：若狭が担当]

後期計画のオリエンテーション

第17回 少子高齢社会の現状

第18回 福祉政策の動向（1）：1970～1980年代

第19回 福祉政策の動向（2）：1990年代

第20回 社会福祉基礎構造改革と高齢者保健福祉改革

第21回 介護保険のサービス特性（施設サービス）

第22回 介護保険のサービス特性（居宅サービス）（1）

第23回 介護保険のサービス特性（居宅サービス）（2）

第24回 高齢者の居住支援

第25回 高齢者の地域生活支援とケアマネジメント（1）：ケアマネジメントの概要

第26回 高齢者の地域生活支援とケアマネジメント（2）：介護保険とケアマネジメント

第27回 高齢者施策の地域展開と包括的支援（1）：地域包括ケアシステム

第28回 高齢者施策の地域展開と包括的支援（2）：地域包括支援センターの実践

第29回 保健・医療・福祉の連携

第30回 総括

成績評価の方法

授業への参加状況（40%）、到達目標に関する報告・レポート発表（60%）により評価する。

フィードバックの方法

提出されたレポートは、総括の際に返却し助言します。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜、資料を配付または文献を紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2501 生活福祉学演習Ⅱ (4単位 通年)

担当教員：小川恭子

授業のねらい

子ども家庭福祉に関する文献を精読し、情報の信頼性や評価の妥当性といった観点を踏まえながら、各自のテーマについて考察を深めるとともに、研究の進め方や論文の書き方および研究倫理について学ぶ。さらに、論文作成を通して、子ども家庭福祉に関する諸問題に対し多面的な解決方法を見出すための知識と技能を習得する。

到達目標

- 1 文献の精読を通し、研究テーマおよび問題意識を明確にするとともに自らの課題も認識できる。
- 2 論文執筆の過程を通し、子ども家庭福祉の諸問題に対する理論と方法についての実践的理解を深めることができる。

授業方法

ディスカッションを中心に授業を展開する。前半は文献講読を主とし、必要に応じて先行研究・文献・資料の収集を行う。後半は各自の研究成果の報告に対し、ディスカッションを通して授業を進める。

事前事後学修

研究テーマに関する事前・事後の学習課題は、授業時に随時指示する。(所用時間 90～120 分程度)

授業計画

第1回 オリエンテーション

授業概要の説明と研究動向の紹介

第2回 先行研究の調査方法と研究倫理

第3回 文献講読と討論

第4回 文献講読と討論

第5回 文献講読と討論

第6回 文献講読と討論

第7回 文献講読と討論

第8回 文献講読と討論

第9回 文献講読と討論

第10回 文献講読と討論

第11回 文献講読と討論

第12回 文献講読と討論

第13回 文献講読と討論

第14回 研究テーマの検討・発表

第15回 研究テーマの検討・発表

第16回 研究計画の立案・発表

第17回 研究計画の立案・発表

第18回 研究成果の報告と討議

第19回 研究成果の報告と討議

第20回 研究成果の報告と討議

第21回 研究成果の報告と討議

第22回 研究成果の報告と討議

第23回 研究成果の報告と討議

第24回 研究成果の報告と討議

第25回 研究成果の報告と討議

第26回 研究成果の報告と論文作成の準備

第27回 研究成果の報告と論文作成の準備

第28回 研究成果の報告と論文作成の準備

第29回 研究成果の報告と論文作成の準備

第30回 研究成果の報告と論文作成の準備

成績評価の方法

到達目標 1～2 を測定する報告 (30%)・レポート (30%) 授業への参加状況 (40%)

フィードバックの方法

毎回のレポート・報告内容に関しては、その都度コメントするとともに、必要に応じて資料を配布する。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

資料は適宜配布する。

参考図書は授業で紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2611 生活福祉学特講 IV(地域福祉) (4単位 通年)

担当教員：小沼春日

授業のねらい

・「地域福祉」をめぐる諸概念、更に地域福祉の対象理解として、地域社会に存在する人・集団・機関等の社会資源のみならず、コミュニティ（都市・農村）自体がどのように形成されてきているのかという史の変遷の理解、またわが国で展開されている先駆的な地域福祉実践事例からの転移可能性の研究を通して、「地域福祉」のあるべき姿を探究していく。
 ・特に今日的課題である「地域支援場面のアセスメント」について焦点を当て、実態調査を通して課題を明らかにし、先進事例研究を通して「地域福祉“らしさ”」を実現するための「地域支援アセスメント」について検討する。

到達目標

1. わが国における「地域福祉」を構造的・全体的に理解することができる。
2. わが国固有の地域社会の歴史性を踏まえ、実践展開について多角的に検証し、今後のあり方について自身の考察を加えて論じることができる。
3. 社会福祉の専門職（社会福祉士）として、担当地域社会への有効な Intervention のためのスキルを理解できる。

授業方法

- ・教員により各単元に関する講義を実施、その内容を基にディスカッションを行う。
- ・各単元に関する報告（小レポート）を6回求める。

事前事後学修

・次回講義内容に関する資料を配布（事前・事後学修事項含む）するので、整理しておくこと。（所要時間4時間程度）

授業計画**第1回 前期オリエンテーション**

近代市民社会成立期以降の地域福祉を取り巻く全体像（政治経済、制度政策、地域生活課題、理論、方法論、思想等）

第2回 地域福祉にかかわる概念整理 1) 欧米**第3回 地域福祉にかかわる概念整理 2) 日本（前半）****第4回 地域福祉にかかわる概念整理 3) 日本（後半）****第5回 <学生による報告①>地域福祉にかかわる概念****第6回 地域社会の歴史性に関する概念整理 1) 農村社会****第7回 地域社会の歴史性に関する概念整理 2) マチ社会****第8回 地域社会の歴史性に関する概念整理 3) 都市社会****第9回 <学生による報告②>地域社会の歴史性****第10回 地域福祉の対象及び実践方法の理解 1) 地域住民（個人・集団）とアセスメント****第11回 地域福祉の対象及び実践方法の理解 2) 地域の関係機関とアセスメント****第12回 地域福祉の対象及び実践方法の理解 3) 地域住民をとコミュニティ・オーガニゼーション****第13回 地域福祉の対象及び実践方法の理解 4) 地域の関係機関とコミュニティ・オーガニゼーション****第14回 <学生による報告③>地域福祉の対象及び実践方法****第15回 まとめ****第16回 後期オリエンテーション****第17回 地域福祉実践事例 1) 地域福祉推進主体の社会資源情報の収集・加工・活用の実態**

(1) 地域包括支援センター

(2) 市区町村社会福祉協議会

第18回 地域福祉実践事例 1) 地域福祉推進主体の社会資源情報の収集・加工・活用の実態

(3) 病院地域連携室

(4) 居宅介護支援事業所

第19回 <学生による報告④>地域福祉推進主体の社会資源情報の収集・加工・活用の実態**第20回 地域福祉実践事例 2) 地域福祉推進主体のネットワークによる社会資源情報の活用の実態**

(1) 社会福祉協議会主導型地域事例

(2) 行政・社協一体型地域事例

第21回 地域福祉実践事例 2) 地域福祉推進主体のネットワークによる社会資源情報の活用の実態

(3) 行政主導型地域事例

(4) 医療主導型地域事例

第22回 <学生による報告⑤>地域福祉推進主体のネットワークによる社会資源情報の活用の実態**第23回 地域福祉実践方法の構造と内容に関する課題整理****第24回 地域福祉実践（個別支援・地域支援・地域づくり）の効果的展開のための社会資源情報の収集・加工・活用及びアセスメント方法の先進事例 1) 個別支援と地域支援・地域づくりの有機的連携事例****第25回 地域福祉実践（個別支援・地域支援・地域づくり）の効果的展開のための社会資源情報の収集・加工・活用及びアセスメント方法の先進事例 2) 個別支援と地域支援の福祉情報の可視化事例****第26回 地域福祉実践（個別支援・地域支援・地域づくり）の効果的展開のための社会資源情報の収集・加工・活用及びアセスメント方法の先進事例 3) 地域支援及び地域づくりのアセスメントのための福祉情報の可視化及び活用事例****第27回 地域福祉実践（個別支援・地域支援・地域づくり）の効果的展開のための社会資源情報の収集・加工・活用及びアセスメント方法の先進事例 4) 地域づくりの促進手段としての福祉情報活用事例****第28回 <学生による報告⑥>地域福祉実践の効果的展開のための社会資源情報の収集・加工・活用及びアセスメント方法****第29回 地域支援場面における共通アセスメントファクターの開発の意義と可能性**

インフォーマル・サポート資源の開発手法のフレームワーク

第30回 まとめ：残された課題と今後の可能性

到達目標1, 2, 3について、講義参与度（10%）、報告①～⑥（各10%、計60%）、総括レポート（30%）により評価します。

到達目標1, 2, 3について、講義参与度（10%）、報告①～⑥（各10%、計60%）、総括レポート（30%）により評価します。

成績評価の方法

到達目標1, 2, 3について、講義参与度（10%）、報告①～⑥（各10%、計60%）、総括レポート（30%）により評価します。

フィードバックの方法

・第15回講義時に、報告①、②、③についてフィードバックを行う

・第30回講義時に、報告④、⑤、⑥についてのフィードバックを行う。更に総括レポートに関する説明を行う。

履修にあたっての注意**教科書**

なし

教科書・参考書に関する備考

教科書・参考書 指定はしないが、必要に応じてレジュメを配布し随時リファレンスを行う。
以下、主要な参考文献（ごく一部）を明示する。

参考書

社会福祉の思想と理論 嶋田健一郎 ミネルヴァ書房 1980
地域福祉の思想と実践 阿部志郎 海声社 1986
地域福祉教室 阿部志郎・右田紀久恵・永田幹夫他編 有斐閣 1984
籠山京著作集 第1巻 ボランティア・アクション 籠山京 ドメス出版 1981
地域福祉論 住民自治型地域福祉の確立をめざして 牧里毎治編著 川島書店 2000
地域福祉情報論序説 森本佳樹 川島書店 1996
自治型地域福祉の展開 右田紀久恵 法律文化社 1993
Environmental practice in the human services: Integration of micro and macro roles, skill and contexts. Neugeboren, B. New York: Haworth 1996
日本の地域福祉 日本地域福祉学会編
地域福祉研究 公益財団法人日本生命済生会

参考ホームページ

h2612 生活福祉学特講 IV(地域福祉) (4単位 通年)

担当教員：船木幸弘

授業のねらい

地域福祉を基調にした社会福祉法の理念の具現化は、地域福祉の推進として 21 世紀の我が国の大きな課題とされ、住民参加を基軸とした福祉コミュニティの形成、特に地域における生活支援に関わる人材ネットワークの形成をいかに推進するかに関心が高まってきている。

本講は、地域福祉の推進における住民の主体形成、地域福祉をめぐるキーワードの理解、地域福祉の推進の方法・システムや地域を基盤とした援助実践のあり方を研究したい人を対象に、ソーシャル・キャピタルに着目していく地域福祉推進のあり方の探求を目的とする。

到達目標

本講は、地域住民は日常の生活の主体者であることへの支援について考究し、地域における生活支援に関わる人材ネットワークの形成をいかに推進するかについて、地域福祉の推進方法やシステムのあり方、ソーシャルキャピタルに着目して考察できることを到達目標とする。

テーマは「人と人のつながり」ソーシャルキャピタル（社会関係資本）をキーワードとし、「ソーシャルキャピタルに着目した地域福祉推進の人材ネットワーク」である。

授業方法

戦後の地域福祉の展開と政策を踏まえた近年の地域福祉研究の動向、特にソーシャル・キャピタルに着目していく講義および関連の先行研究についての文献講読・討議と、受講者の関心テーマにも応じた討議を行いながら、つぎの授業計画によって行う。

事前事後学習

なお、この授業についての自宅学習は、授業で予め提示された文献・資料の要約（所要時間 40 分）・整理（所要時間 40 分）を行うと効果的である。

授業計画

- 第 1 回 イントロダクション（前期の目的と進め方の提案・協議）
- 第 2 回 地域福祉研究の動向：近年の概要
- 第 3 回 近年の地域福祉研究の動向（1）：コミュニティ
- 第 4 回 近年の地域福祉研究の動向（2）：ボランティア、NPO
- 第 5 回 近年の地域福祉研究の動向（3）：地域組織化活動
- 第 6 回 近年の地域福祉研究の動向（4）：ソーシャルキャピタル
- 第 7 回 近年の地域福祉研究の動向（5）：地域福祉とソーシャルキャピタル
- 第 8 回 地域福祉における相談援助：総合的かつ包括的な相談援助 -コミュニティと地域福祉-
- 第 9 回 地域福祉の構成内容（1）：社会政策
- 第 10 回 地域福祉の構成内容（2）：福祉施設、サービス体系
- 第 11 回 地域福祉の構成内容（3）：組織的推進
- 第 12 回 地域福祉の構成内容（4）：ネットワーク論
- 第 13 回 地域福祉計画の策定プロセス
- 第 14 回 地域福祉をめぐるキーワードに関する文献講読、資料検討－報告と討議
- 第 15 回 前期総括
- 第 16 回 地域福祉とソーシャル・キャピタル
- 第 17 回 ソーシャル・キャピタルの定義
- 第 18 回 ソーシャル・キャピタルの緒理論：概要
- 第 19 回 ソーシャル・キャピタルの理論（1）：私財
- 第 20 回 ソーシャル・キャピタルの理論（2）：公共財
- 第 21 回 地域福祉をめぐるキーワード（1）：コミュニティワーク
- 第 22 回 地域福祉をめぐるキーワード（2）：コーディネーション
- 第 23 回 地域福祉をめぐるキーワード（3）：ファシリテーション
- 第 24 回 地域福祉をめぐるキーワード（4）：ネットワーキング
- 第 25 回 地域福祉をめぐるキーワード（5）：ソーシャルアクション
- 第 26 回 地域福祉をめぐる新たな手法：ホールシステムアプローチ
- 第 27 回 生活支援・人材ネットワークの形成
- 第 28 回 地域福祉の推進と実践（推進組織、人材、課題）
- 第 29 回 各自の関心テーマに関わる文献講読・資料検討－報告と討議
- 第 30 回 総括

成績評価の方法

到達目標の測定を行う課題レポート（70%）と授業への参加度（30%）により評価する。

フィードバックの方法

各回の授業の前後において、事前課題のほか提出物などの作成指導、添削指導を適宜行う。

履修にあたっての注意

受講者の興味・関心を加味しながら、授業内容・方法の詳細を調整していきます。コミュニティづくりと地域における人間関係や対人援助への貢献についての関心を持ちながら、地域福祉の推進方法を検討していく姿勢を期待しています。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜資料を配布する。
参考書は講義で紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h2801 生活福祉学特講 VI(子どもと福祉) (2単位 通年)

担当教員：船木幸弘

授業のねらい

本講義は、我が国における子どもと家庭における諸問題の変容と背景を研究したい人を対象に、子どもの権利と最善の利益を踏まえたうえで、我が国における戦前・戦後の子どもと家庭福祉の制度・政策の変遷・動向と、国・地方・施設などが果たしてきたことを概説し、諸般の課題を明らかにすることを目的とする。また、これらから見えてくる限界を見定めたことを基に、今後展開していく子どもの健全育成の目指すべき方向と、社会福祉（地域生活）、特にソーシャルワーク実践のあるべき姿を探求していく。

到達目標

- ・子ども家庭福祉の政策・制度の限界、子どもの権利と最善の利益を理解する。
- ・組織で働く専門職として、組織マネジメントの視点と方法を理解する。
- ・対人サービス組織（小集団）を基盤に、チームワークの有機的な作用を理解する。
- ・子どもの社会化（健全育成）の目指すべき方向を理解した全人的アプローチを探求する。

授業方法

- ・関連資料のレビューをとおして、講義を行う。
- ・各回の授業の後半には、示された資料から論点を見出して討議を行う。

なお、各自の関心テーマに関わる文献講読・資料検討・報告と討議を求める。

事前事後学習

また、この授業についての自宅学習は、予め提示された文献と資料の要約（所要時間 40 分程度）・整理（所要時間 60 分程度）を行うと効果的である。

授業計画

- 第1回 イントロダクション（子どもをめぐる諸問題の変容と背景）
- 第2回 子どもの権利と子どもの最善の利益（子どもの権利条約の概説）
- 第3回 子ども家庭福祉制度の変遷
- 第4回 子ども家庭福祉政策・制度の動向
- 第5回 子ども家庭福祉と子どもの健全育成をめぐる研究動向
- 第6回 子ども家庭福祉の諸相①：国・地方自治体が果たしてきたこと
- 第7回 子ども家庭福祉の諸相②：児童福祉施設・機関が果たしてきたこと
- 第8回 子ども家庭福祉の諸相③：専門職・担い手が果たしてきたこと
- 第9回 子ども家庭福祉の諸相④：児童委員、里親が果たしてきたこと
- 第10回 子ども家庭福祉の諸相⑤：子どもの社会化と仲間集団・地域が果たしてきたこと
- 第11回 子ども家庭福祉の相談支援①：スクール・ソーシャルワーク
- 第12回 子ども家庭福祉の相談支援②：ファミリー・ソーシャルワーク
- 第13回 子ども家庭福祉の相談支援体制①：チーム・アプローチ
- 第14回 子ども家庭福祉の相談支援体制②：スーパービジョン、コンサルテーション
- 第15回 子どもと家庭福祉の今後の方向：子どもの地域生活と健全育成

成績評価の方法

到達目標の測定を行う課題レポート（70%）と授業への参加度（30%）により評価する。

フィードバックの方法

各回の授業の前後において、事前課題のほか提出物などの作成指導、添削指導を適宜行う。

履修にあたっての注意

受講者の興味・関心を加味しながら、授業内容・方法の詳細を調整していく。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考書は講義で紹介する。

参考書

参考ホームページ

h2802 生活福祉学特講 VI(子どもと福祉) (2単位 通年)

担当教員：小川恭子

授業のねらい

社会状況の変化に伴い深刻化する子どもと家族の問題について、現代社会が抱える諸課題との関連から分析を行い、社会福祉実践の課題について考察する。特に社会的養護問題に焦点をおき、今日的課題としての虐待・非行・貧困等を取り上げ、検討する。

到達目標

- 1 社会的養護問題を通して、子ども家庭福祉の本質的課題が理解できる。
- 2 子ども家庭福祉サービスと実践のあり方について理解できる。

授業方法

講義・ディスカッションを交えた授業を展開する。履修者の課題報告を中心に、実務経験者の立場から様々な事例を紹介し議論を深める。

事前事後学修

随時、授業テーマに関する事前・事後の学習課題を指示する。(所用時間 60～90 分程度)

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、現代社会と子ども家庭問題
- 第2回 子どもを取り巻く状況 (1)子ども虐待：実態
- 第3回 子どもを取り巻く状況 (2)子ども虐待：福祉施策の現状
- 第4回 子どもを取り巻く状況 (3)ひとり親家庭：実態
- 第5回 子どもを取り巻く状況 (4)ひとり親家庭：福祉施策の現状
- 第6回 子どもを取り巻く状況 (5)少年非行：実態
- 第7回 子どもを取り巻く状況 (6)少年非行：福祉施策の現状
- 第8回 子どもを取り巻く状況 (7)子どもの貧困：実態
- 第9回 子どもを取り巻く状況 (8)子どもの貧困：福祉施策の現状
- 第10回 子どもの権利擁護
- 第11回 児童相談所の役割・機能
- 第12回 社会的養護実践 (1)家庭養護
- 第13回 社会的養護実践 (2)施設養護：基本原理
- 第14回 社会的養護実践 (3)施設養護：支援の実際
- 第15回 社会的養護実践 (4)施設養護：ソーシャルワーク

成績評価の方法

到達目標 1～2 を測定する課題レポート (50%) 授業への参加状況 (50%)

フィードバックの方法

毎回の課題報告については、授業内で口頭で説明をするとともに、必要に応じて解説資料を配布する。期末レポートについては、採点后に解答例を説明しディスカッションを行う。

履修にあたっての注意

日頃から社会的養護に関連するニュースや動向について情報を収集し、問題意識をもって積極的に参加すること。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

資料は適宜配布する。
参考図書は授業で紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h3101 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：伊井義人

授業のねらい

大学院での学習成果の集大成としての修士論文を作成する。その際には、「教育」という事柄を幅広く理解し、それが日々の日常生活にどのような影響をおよぼすのかを研究することが肝要であることを理解することを目指す。

到達目標

- ・教育という事象を幅広く捉えるとともに、一つのテーマに絞り、現状を分析し、解決策を提示する。
- ・自らが選んだ教育テーマに関する先行研究をレビューすることができる。
- ・質的、量的なデータを収集し、分析することができる。
- ・自らの考えを、文章形式で論理的に提示できる。

授業方法

- ・基礎的な論文作成の作法については、講義方式で進める。
- ・履修者自身の課題設定をもとに、課題を進めていく。そのため、配布資料の作成などの事前準備が必要となる。
- ・個別指導（オンラインを含）を通じた論文作成を行う。

事前事後学習

- ・講義で議論するテーマは、事前に教員によって提示する。そのテーマについて事前に書籍やインターネットなどで情報収集した上で、自らの考えを整理する。(40分程度)
- ・講義内で議論した内容について、他者の考えを加味した上で、自らの意見を再吟味し、整理する。これらは講義内で発表する可能性がある。(20分程度)

授業計画

1. 論文テーマの検討と決定、研究倫理
2. 先行研究の分析
3. 論文構成の検討と決定
4. データの収集と分析
5. 中間発表
6. 論文の執筆と検討（研究倫理について）
7. 最終報告と自らの論文への振り返り

成績評価の方法

修士論文の構成・内容・最終発表により評価する。

フィードバックの方法

- ・個別にフィードバックが必要な場合は、ポータルシステムなどを通して、コメントする。

履修にあたっての注意

修士論文作成の際には、教育に関して、深い洞察と考察が必要であることを認識した上で、履修してほしい。

教科書

特になし

教科書・参考書に関する備考**参考書****参考ホームページ**

h3102 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：内田博

授業のねらい

論文の構成を考え、独自性を確認しつつ結論を導いて論文にまとめていく。

到達目標

自分の問題意識を出発点にして、先行研究の分析をもとに修士論文としてまとめることができる。

授業方法

受講生それぞれの研究課題に応じて、研究内容及び研究方法等を確認しながら、適宜、個別に指導する。

事前事後学修

事前に必要な資料を分析して文章化する。事後は、授業でのコメントを踏まえて、資料を解析し直すか新たな資料に取り組む。
(前後およそ90分)

授業計画

修論の執筆状況に応じて個別に相談しながら進める。その際、研究倫理についても指導する。

成績評価の方法

研究の進め方 (30%)、研究成果 (70%)

フィードバックの方法

毎回のコメント

履修にあたっての注意

なし

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

参考書

参考ホームページ

h3103 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：岡崎由佳子

授業のねらい

食物学の研究に関連する文献の収集、実験の遂行、データの解析等を行いながら、修士論文の作成に必要な知識と技能を習得する。

到達目標

自らの研究テーマを修士論文としてまとめることができる。

授業方法

受講生の研究テーマに応じて、個別に指導を行う。

事前事後学修

毎回、文献の収集、データ解析、論文執筆などに関する事前・事後課題の提出を課す（所要時間 180 分程度）。

授業計画

- 1 食物学に関する文献の収集を行い、各自の研究のテーマを設定する。
- 2 研究倫理について確認する。
- 3 研究を遂行する上で必要な実験手法を確立し、機器分析に関する技能を習得する。
- 4 実験データの解析と考察を重ねる。
- 5 研究結果の発表と議論を通して、得られた成果を修士論文としてまとめる。

成績評価の方法

到達目標を測定するため、研究への取り組み方（50%）、修士論文の内容（50%）により評価します。

フィードバックの方法

課題については、口頭で解説し、内容に応じて関連資料を配布する。

履修にあたっての注意

教科書

「なし」

教科書・参考書に関する備考

参考書

参考ホームページ

h3105 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：田中宏実

授業のねらい

大学院における学習成果を集成し、各自が設定した研究テーマや目的に対するアプローチの計画的遂行と管理に取り組む。先行研究や文献資料の吟味と、客観的なデータの集積や検証と論理的推敲を重ねて論理性を確保し、論文構成や資料提示に反映させて修士論文を作成する。論文作成能力および関係資料の収集技法や評価視点の獲得ならびに研究方法論の修得を目指す。

なお、本特別研究においては、次のテーマに類する領域で各自の個別課題を設定して論文作成に取り組む。

- ・家庭科「住居」分野
- ・まちづくり
- ・住教育
- ・住環境に関わる分野

到達目標

- ・自らの問題意識や知的探求心に拠るテーマを掲げて研究のプランニングや実施を準備して遂行できる。
- ・研究目的に対する先行研究のレビュー、仮説の構築と検証のためのデータ・資料の収集、分析、結果の提示をしたり、考察及び評価することができて研究の方法論を説明できる。
- ・事象の説明や傾向の解釈、因果関係、論理性、妥当性、再現性、信頼性、新奇性、倫理的妥当性の考証や論理構成等のための基礎的能力を習得して論文作成に反映できる。

授業方法

各自の設定課題について個別に指導を行う。構成・組み立ての検討とデータ収集・資料作成を通じて研究手続きの修得を図り、論文作成に取り組む。

事前事後学修

事前学修として調べる内容や発表する内容を指示する。事後学修として、理解が不足している部分を確認し調べ学習のための課題を出す（所要時間毎回2時間程度）。

授業計画

論文の作成は概ね以下の手順で進める。

- 1 1) 研究テーマの検討
2) 研究計画の作成
3) 論文構成の検討、文献・資料の収集
4) 研究倫理と研究における倫理的配慮の検討
- 2 1) 論文構成骨子および作業手順の確認
2) 文献精読、資料の粗分析、データの収集
- 3 1) 論点及び言及事項の整理
2) 資料・データの解析
3) 論理展開の推敲
4) 中間報告
- 4 1) 本原稿の執筆
2) 論旨の推敲
- 5 1) 記述内容と表現の吟味
2) 体裁の補正
3) 集成・まとめ

成績評価の方法

研究への取り組み方（50%）、修士論文の構成・内容（50%）、により評価する。

フィードバックの方法

質問や理解が不足している部分は口頭で解説する。課題を確認し、次回の回につなげる。

履修にあたっての注意

自主的・計画的に取り組んで下さい。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

必要に応じて随時指示する。

参考書**参考ホームページ**

h3106 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：若狭重克

授業のねらい

各自の問題意識に基づき設定した研究テーマについて、計画的に取組み修士論文の完成を目指します。そのなかで、先行研究や文献・資料等の分析や、研究目的に適ったデータ収集と分析の方法及び論文作成能力を修得します。テーマは以下の内容とします。

- ・高齢者に対するの福祉制度に関すること
- ・高齢者に対する支援に関すること
- ・ソーシャルワーク方法論に関すること

到達目標

1. 自らの問題意識に基づき研究テーマを設定して、研究を遂行できる。
2. 研究方法を理解し、作業をすすめ論文をまとめることができる。

授業方法

適宜ディスカッションをし、概ね以下の流れで論文を作成します。

事前事後学習

研究内容及び進捗状況に応じて、事前・事後学習を求めます。(毎回2時間程度)

授業計画

- 1 研究枠組みの整理
 - 1) 研究テーマおよび研究方法の検討
 - 2) 研究計画の作成
 - 3) 文献・資料の収集
 - 4) 研究倫理について
- 2 データの収集と分析
 - 1) データ収集の方法検討
 - 2) データ収集
 - 3) 資料及びデータの分析
- 3 論文構成の検討と中間発表
 - 1) 論文構成の検討
 - 2) 中間発表
- 4 本文の執筆
 - 1) 本文の執筆
 - 2) 問題点の整理
- 5 論文の完成

成績評価の方法

到達目標1を測定する研究課題への取り組み方(30%)、到達目標2を測定する修士論文の内容(70%)により評価する。

フィードバックの方法

研究内容に対する指導・助言を適宜行います。また、研究方法及び論文作成への対応を随時行います。

履修にあたっての注意

自覚的に取り組んでほしい。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

適宜紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h3107 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：小川恭子

授業のねらい

子ども家庭福祉に関するテーマを設定し、文献の精読やデータ・資料の収集を行いながら、的確な分析・考察に基づく修士論文を作成することを目指す。

到達目標

1. 研究テーマに関する知識や動向を把握できる。
2. 修士論文作成に必要な基礎的知識と技術を習得し、論文をまとめることができる。

授業方法

履修者の研究テーマに応じて、適宜個別に指導を行う。

事前事後学修

研究テーマに関する事前・事後の学習課題は、授業時に随時指示する。(所用時間 90～120 分程度)

授業計画

受講生の進度に応じながら、以下の内容について個別に進める。

1. 研究目的の検討および研究倫理について
2. 研究テーマの設定
3. 先行研究の分析
4. 研究論文の構成の検討
5. 研究方法の検討 (データの収集と分析)
6. 論文の執筆
7. 研究成果の発表

成績評価の方法

到達目標 1～2 を測定する修士論文の内容 (100%)

フィードバックの方法

毎回のレポート・報告内容に関しては、その都度コメントするとともに、必要に応じて資料を配布する。

履修にあたっての注意

主体的・計画的に取り組むこと。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

研究テーマに関する参考文献を適宜紹介する。

参考書**参考ホームページ**

h3108 特別研究 (6単位 通年)

担当教員：庄井良信

授業のねらい

子どもと教育に関する研究テーマ(または臨床教育学に関する研究テーマ)を設定し、文献の精読、データの収集を行いながら、的確な分析と考察に基づく修士論文を作成することを目的とする。

到達目標

1. 専門分野の研究特性を踏まえて適切な論文構成ができる。
2. 先行研究及び関連研究を適切に検討し、自己のテーマを適切に設定できる。
3. 適切なテーマ設定に基づいて、固有で独創的な内容を論述することができる。
4. 論述において一貫性のある表現ができる。
5. 研究倫理を十全に自覚し、文献のテキスト、収集したデータ等を、適切な方法で扱うことができる。

授業方法

履修者の研究テーマと論文作成の進捗状況に応じて、適宜個別に指導を行う。

事前事後学修

研究テーマに関する事前・事後学修については、授業時に随時指示する。(所用時間 90～120 分程度)。必要な文献を事前に読むことを求め、事後に質問やコメントをメール等で送付することを求める。

授業計画

- | | |
|------|--|
| 第1回 | 研究のデザイン (1) 固有な学びの軌跡から問うべき問いの糸口を探る |
| 第2回 | 研究のデザイン (2) 研究動機の社会的意義を明らかにする |
| 第3回 | 研究のデザイン (3) 研究倫理について理解する |
| 第4回 | 研究のデザイン (4) 研究動機を研究目的に変換する |
| 第5回 | 研究のデザイン (5) 研究目的に相応しい研究方法を選ぶ |
| 第6回 | 先行研究の調査と分析 (1) 文献・資料(著書)を収集する |
| 第7回 | 先行研究の調査と分析 (2) 文献・資料(学術論文)を収集する |
| 第8回 | 先行研究の調査と分析 (3) 収集した文献・資料から研究上の問いを精査する |
| 第9回 | 先行研究の調査と分析 (4) 収集した文献・資料から研究上の問いを設定する |
| 第10回 | 修士論文中間発表におけるプレゼンテーション資料の作成を支援する |
| 第11回 | 修士論文中間発表—プレゼンテーションとディスカッション(研究構想の発表) |
| 第12回 | 研究法(1): 質的データ分析(インタビュー調査)の方法と倫理について学ぶ |
| 第13回 | 研究法(2): 質的データ分析(対話を伴うフィールド調査)の方法と倫理について学ぶ |
| 第14回 | 研究法(3): 社会参画型のデザイン実験の方法と倫理について学ぶ |
| 第15回 | 予備調査の遂行と協働省察(1) |
| 第16回 | 予備調査の遂行と協働省察(2) |
| 第17回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導(1) 先行研究をレビューする(1) |
| 第18回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導(1) 先行研究をレビューする(2) |
| 第19回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導(1) 先行研究をレビューする(3) |
| 第20回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導(1) 先行研究をレビューする(4) |
| 第21回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—研究目的と研究方法を叙述する(1) |
| 第22回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—研究目的と研究方法を叙述する(2) |
| 第23回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—調査結果(文献/データ)を解釈、評価する(1) |
| 第24回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—調査結果(文献/データ)を解釈、評価する(2) |
| 第25回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—調査結果(文献/データ)を解釈、評価する(3) |
| 第26回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—調査結果(文献/データ)を解釈、評価する(4) |
| 第27回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—研究の結果をまとめる(総合考察)(1) |
| 第28回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—研究の結果をまとめる(総合考察)(2) |
| 第29回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—今後の課題をまとめる(総合考察)(3) |
| 第30回 | 学位論文(修士論文)作成に関する指導—今後の課題をまとめる(総合考察)(4) |

成績評価の方法

到達目標 1～5 を測定する修士論文の内容 (100%)

フィードバックの方法

毎回の報告内容に関しては、その都度コメントするとともに、必要に応じて資料や文献を紹介する。講義後の質問やコメントに応答し、次回の授業の冒頭で口頭でも応答し、対話的な学びの質を深める。

履修にあたっての注意

それぞれの受講生が持つ切実な問いや課題意識をベースにして、質の高い学位論文(修士論文)を仕上げることを重視します。

教科書

なし

教科書・参考書に関する備考

学位論文(修士論文)作成の過程で、研究テーマに関する参考文献を適宜紹介する。

参考書

なし

参考ホームページ